

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 14 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00126

研究課題名(和文)近代日本の「科学」と伊波普猷 科学思想史から「沖縄学」を照射する

研究課題名(英文)"Science" in Modern Japan and Iba Fuyu : Irradiating "Okinawan Studies" from the History of Scientific Thought

研究代表者

三笥 利幸 (MITOMA, TOSHIYUKI)

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：60412615

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、伊波普猷の思想がいかにして生み出されたのかを、日本の科学思想史からとらえ返すものである。19世紀から20世紀の世紀転換期に生きた伊波は、当時の最先端「科学」に大きく規定されつつその学的営為を重ねた。彼のまわりには、歴史学や言語学のみならず、進化論、優生学あるいは遺伝学といった自然科学までがあふれていた。そうした「科学」の状況と、沖縄のおかれた政治的・文化的位置とが相まって、日本に包摂されながら排除される沖縄を引き受けつつ内破していく思想が形成されたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

既存の研究では、伊波普猷は日本への同化主義を唱えたかどうかひとつの大きな論点となってきたが、本研究では、そうした二項対立的な議論から脱し、科学思想史の中に伊波の思想を投げ返し、当時の知的状況が彼にどのような思想を生み出させていったのかを明らかにしたところに学術的意義がある。それは、伊波の思想を、沖縄学として単に称揚したり、同化主義だとして切り捨てたりするという評価の仕方から脱して、日本近代の「科学」が知識人をどう規定していったのか、そしてそこに生み出された言説がどのような意味を持ったのかを捉えるという、科学(史)への根本的な批判の地平を切り開くものである。

研究成果の概要(英文)：This research aims to examine how the ideas of Iba Fuyu were created from the history of Japanese scientific thought. He was surrounded by not only history and linguistics, but also natural sciences such as evolution theory, eugenics, and genetics. The situation of such "science" combined with the political and cultural position of Okinawa made his idea that broke through the exclusion of Okinawa while being included in Japan from the inside.

研究分野：社会思想史

キーワード：伊波普猷 沖縄 沖縄学 科学思想史 包摂/排除 進化論 優生思想

1. 研究開始当初の背景

伊波普猷研究の初期の段階では、伊波の「沖縄学」それ自体を研究することが暗黙の前提だった。伊波普猷その人の伝記的研究(外間守善編『伊波普猷 人と思想』平凡社、1976年など)はもちろん、伊波とその生きた時代を論じる研究(比屋根照夫『近代日本と伊波普猷』三・一書房、1981年など)といった代表的研究は、『伊波普猷全集 全11巻』(平凡社、1974-6年)の刊行へとつながるものだった。歴史学、民俗学など諸領域からも研究が進められ(高良倉吉『沖縄歴史研究序説』三・一書房、1980年など)、たとえば「琉球処分」をめぐる論争を生み出したりもした。こうした研究が進むなか、沖縄が日本に「復帰」することが決定した1970年前後に、今度は、伊波の政治性への批判がなされはじめた。新川明らによる「反復帰」論のなかで、伊波は日琉同祖論を唱える同化主義者であるとして激しく批判されたのである(新川明『反国家の凶区 沖縄・自立への視点』社会評論社、1996年)。この批判は大きな議論を巻き起こした。その後、こうした同化主義という批判への応答として、伊波のテキストに内在しつつ、その思想の可能性や伊波の置かれた政治的-社会的状況までを含めてとらえ返し、伊波は同化主義ではなく、むしろ日本の帝国主義的植民地主義に抗おうとした側面があることが指摘されるようになった。それは先駆的には鹿野政直(『沖縄の淵 伊波普猷とその時代』岩波書店、1993年)によって、そして近年では富山一郎(『暴力の予感 伊波普猷における危機の問題』岩波書店、2002年など)らによって、そうした研究がなされている。

このように伊波の学問内容およびその根本思想へと研究は深化しているとはいえ、やはりそこで焦点になっているのは、伊波の思想が日本=ヤマトへと回収されるものか、それともそれを批判するものであったのか、ということであった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第一に、伊波普猷の「沖縄学」を近代日本の科学思想史からとらえ直すことである。従来の伊波研究とは違い、伊波の学問がいかんにして生まれたのかを問う。

第二の目的は、近代日本の科学思想史を個別領域・分野ごとに見るのではなく、それが渾然と「科学」としてひとりの思想家に作用するとき、如何なる思想や学問的業績をそこに生じさせるのかをあきらかにすることである。

この第一の目的と第二の目的は便宜上分けているが、これらはひとつの目的の表裏をなしている。つまり、伊波の「沖縄学」の成立を日本の科学思想史からあきらかにすることは、日本の科学思想が如何なる思想を生み出すものであったのかを示すことになる。伊波の学問それ自身を真正面から論じようとするのが従来の研究であるとするれば、本研究は伊波を取り巻く科学思想がどのように伊波の学問へと結実し、彼の思想を形成していったのかを問う、その意味では従来の研究とは逆方向から検討を行っている。

また、本研究は、従来の科学思想史の研究ともちがうアプローチとなった。専門分化した諸領域における科学思想の流れはそれぞれ研究もなされている。しかし、伊波の時代の「科学」は各領域に分化しながらも輪郭のはっきりしない「科学」が渾然一体となってひとりの思想家に流れ込み、ひとつの「科学」として作用している。そうした「科学」がどういう思想を生み出しているのかを見極めていく作業は、これまでなされてこなかったといっていいたいだろう。

ここで取り上げる限りの科学思想史にとどまらず、さらに広い科学思想史への問い、つまり、今日の科学のあり方への批判へと展開していく。一例ではあるが、戦前から戦中の優生学は徹底的に批判され、戦後は新たな歩みをはじめたはずだったが、現実には優生学に基づき、障がい者への強制不妊手術が行われ続けていた。ここには外延を自在に広げる「科学」の動きを見なければならぬ。そうであれば、専門分化した科学思想ではとらえきれない「科学」がうごめく現代への批判的視角を生み出すことも目的の一つとなる。

3. 研究の方法

本研究では、まず日本近代の科学思想がいかんにか形成されたかを考察した。取り扱った年代は、日本に進化論や社会ダーウィニズムといったものが紹介、導入されはじめる1880年前後から伊波が再上京する1925年頃までである。進化論や、E.ヘッケルなどもふくめた優生学、あるいは遺伝学が、どのように日本に紹介、導入されていったのかを探った。具体的には、ダーウィンの最初の紹介者である石川千代松、伊波に大きな影響を与えている丘浅次郎らのいわゆる自然科学系と区分されるような研究者の言説を扱った。また、海野幸徳といった優生学者は伊波とはかなり距離があるが、こうした伊波との接点が見いだせないような論者についても、そうした区別がなぜ起こったのかについて留意しつつ検討を加えた。

上記と重なるところがあるが、次に、当時の政治-社会的な言説にどのように「科学」が導入されたのかを考察した。また、当時盛んに紹介されたH.スペンサーの取り上げられ方についても考察した。たとえば、福沢諭吉から自由民権論にいたる議論と加藤弘之に典型的な国権論は、

対立する思想でありながら進化論を使うところで通底している。こうした言説のあり方を吟味した。

さらに 1884 年に人類学会が設立され、まさに「科学」としての相貌を持ちはじめた人類学について考察した。これまた伊波が大きく影響を受けている領域であり、具体的には坪井正五郎、鳥居龍蔵らについて検討した。

以上のような考察から、「科学」がどのようなかたちで伊波の思想のなかに持ち込まれているのかを検討していった。具体的には『古琉球』や『琉球の政治』などのテキストに収められた論考をひとつずつ取り上げ、それらのなかに前年度の作業であきらかにした「科学」がどのように結びついているかを精緻に追いかけた。また同時に、近代日本の「科学」が、諸領域に区分されることなく「科学」としてひとりの思想家に流れ込み、溶融していくことで、いかなる思想が生み出されるのかを問う地平へと至ろうとした。

4. 研究成果

すでに私は伊波の女性論を『沖縄女性史』(1919 年)などの著作から考察していたのだが、そこで確認したのは伊波の「近代的思考」だった(三笥 2016)。伊波の主張したそこで示される女性の権利保障、地位向上の要求などは、まさしく「近代」の人権などにかかわる議論がベースにあるものだった。さらに本研究では、こうした近代的思考をもつ伊波が、進化論あるいは積極的優生思想に影響されながら日本の包摂と排除をふたつながらに引き受けつつ内破していく様子をあきらかにした。そこには、日本に包摂されることを、進化論の「科学」的知見を援用することでかえって日本からの排除を封じ、沖縄に「近代」をもたらそうとするという伊波の戦略も見えてくる。同化主義かどうかというレベルでは見えない、伊波独自の思想は、たとえばこうした当時の「科学」状況、知的状況から捉え返すことでわかってくる。

また、伊波が優生思想に影響され、民族衛生講話活動を行っていたことはよく知られている。これを「優生思想」であるとして、そのままナチズムやハンセン病の断種政策といったものを連想させそれらに直結させるような伊波批判がある(徳田 2016 など)。しかし、伊波の優生思想は劣等な遺伝子の殲滅や断種といった消極的優生思想ではなかった。むしろ、彼は積極的優生思想を選び取っていたのであり、沖縄各所で行われた衛生講話も諸論考も、そうした意味合いのものとして位置づけなければならない。もちろん、それは伊波が語り、書き残したものをそのまま肯定するということを意味しない。むしろ伊波の優生思想はナチズムといったおぞましいものへと結実することがなかっただけでなく、伊波自身が思うような沖縄の状況変換に資するものではないことを彼自身が思い知り、そこから身を引いていくことになったのである。彼に優生思想を反省させるという「科学」的状況は当時認められなかった。それでも消極的優生思想が日本でも表だって議論されるようになる 1920 年代や 30 年代には、伊波は優生思想から袂を分かっている。伊波は、沖縄のおかれた政治的-文化的な位置から、ある種の「科学」批判を行うことになったのだ。

また、進化論は皇国史観あるいは国体論などにとっては都合が悪いものであり、それは日本の帝国支配、植民地支配とはそりが合わないものだった。それを伊波が取り込んでいったことはたしかだが、それは他方で伊波自身にあった制約 アイヌや「生蕃」に対する差別意識といったものを乗り越えていくところに作用しているかどうか。この点は、いまだ明確には結論は出していない。伊波は丘浅次郎の影響を受けていることはこれまでも指摘されてきたが、丘の特に『進化論講話』(1904 年)が日本への進化論紹介に果たした大きな役割や、そこに展開された、言葉や定義によって自然に差別を持ち込むことへの批判にまで目を配れば、伊波がこうした「科学」的知見を援用しつつ、自身の差別意識をも相対化した可能性はある。ただし、それは時系列からすれば無理のある想定になっており、さらに科学思想と伊波の言説との研究をしなければならない。

以上のように、伊波が当時の「科学」からどのように影響を受け、「科学」がいかに伊波を生み出したのかを検討した。そこでわかってきたのは、伊波の思想は、当時の「科学」をいちはやくとりいれて形成されているということである。それは女性論の先駆性とパラレルであり、「科学」への彼の強い関心が見て取れる。ただし、彼の主張を展開していくのに強力な武器として手にしたはずの「科学」は、伊波の思想を希有なものとして際立たせつつ、かつ、きわめて危うい人種主義や植民地主義へと転落させかねないものだった。そして、その危うさを伊波自身がどこまで自覚的にわかっていたのかは別として、彼はその「科学」を見限ってしまう。特に 1920 年代後半以降の伊波の「沖縄」への沈潜は、そうした様子を如実に示している。伊波の動きとは裏腹に、「科学」はこの時期にはよりいっそうの「発展」を遂げており、伊波がそれに基本的に目を向けず、少なくとも積極的に自身の知見として取り入れようとしていないことは何を意味するのか。こうした点についての着想は得てはいるが、具体的には今後の課題となる。

なお、研究成果については、現在「伊波普猷と丘浅次郎 伊波の思想形成へ進化論の果たした役割」(仮題)を『立命館産業社会論集』第 55 巻に上梓すべく準備中である。

引用文献

徳田匡 2016 「人種主義の深淵 伊波普猷における優生学と帝国再編」『現代思想』V01.44-2.

三笥利幸 2016 「伊波普猷著『沖縄女性史』の「亀裂」 真境名安興との「共著」として読む」『九州国際大学教養研究』第22巻第3号

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------